

P-4B-60

提案型プレアポイド報告のススメ

高槻赤十字病院 薬剤部¹⁾、同 副院長²⁾

○奥村 優介¹⁾、小島 一晃¹⁾、美和 孝之¹⁾、仲 忠士¹⁾、松本 弘誠¹⁾、濱武 清範¹⁾、小西 史子¹⁾、酒井 ちひろ¹⁾、通山 由香¹⁾、福井 美礼¹⁾、千葉 渉²⁾

【目的】プレアポイド報告は、処方不備などの単なる指摘のみで完結する「指摘型」と指摘時に処方提案など薬剤師の意見を付加する「提案型」に分類でき、提案型の割合が多いほど薬剤師がより深く薬物治療に介入していることと我々は考える。そこで、薬剤師の薬物治療への介入という点から、提案型プレアポイド報告について解析したので報告する。

【方法】2014年2月～11月の期間、薬剤師より報告されたプレアポイド事例を指摘型・提案型に分類し、報告数・報告内容等に関する調査を行ない、検討を加えた。なお、ポスターでは調査期間を延長し、データの up date を行う予定である。

【結果】報告されたプレアポイドは、病棟担当者164件・調剤室担当者143件であった。そのうち、提案型の割合は前者22.6%・後者20.3%であった。また、ポスターにて提案型プレアポイドの具体的な事例を挙げたい。

【考察】当院における提案型プレアポイドの割合は全体の約2割であり、まだまだ薬剤師が薬物治療へ介入する余地があると思われる。指摘だけではなく薬剤師の見解を提案することで議論が深まり、患者さんにとってより良い解決法が導き出せる可能性もある。今後は、提案型プレアポイドの割合を上げること、薬物治療の質の向上および薬剤師のスキルアップにつなげたいと考えている。

P-4B-62

当院における経口糖尿病薬の処方割合の変化～SU薬からグリニド薬へ～

日本赤十字社長崎原爆病院 薬剤部¹⁾、同 内分泌・代謝内科²⁾

○神田 省吾¹⁾、井上 知哉¹⁾、川尻 さおり¹⁾、安井 順一²⁾、町田 毅¹⁾

【目的】2010年4月、インクレチンとSU薬の適正使用に関するレコメンデーションが発表され、両剤の併用による重篤な低血糖への注意喚起がなされた。経口糖尿病薬の中でもSU薬はインスリンの基礎分泌を促進するため、遷延性の低血糖が危惧されている。その一方、同じインスリン分泌促進薬であるグリニド薬は追加分泌を促進するため、低血糖のリスクは比較的少ないと言われる。今回我々は、内分泌・代謝内科の患者を対象とし、インクレチン関連薬であるDPP-4阻害薬を処方された全患者について併用薬を調査した。その中でも特にSU薬およびグリニド薬を併用している患者数の変化を中心に報告する。

【方法】DPP-4阻害薬とグリニド薬の併用が解禁になった2013年3月から、2014年3月、2015年3月の各1か月間にDPP-4阻害薬を処方された全患者の併用薬について調査しその割合について比較した。

【対象】2013年：242名、70.42歳、HbA1c 7.50、2014年：300名、69.53歳、HbA1c 7.55、2015年：259名、68.02歳、HbA1c 7.68

【結果】DPP-4阻害薬服用中患者のSU薬内服患者数：グリニド薬内服患者数は、2013年では約9：1（87名：10名）、2014年では約5：1（101名：20名）、2015年では約1.6：1（73名：45名）であった。今回の調査の結果、SU薬に対するグリニド薬の割合が年々増加していた。これは低血糖を防ぎつつ血糖コントロールを改善することを目標とするという、現在の糖尿病治療を反映した結果であると考えられる。今後は処方割合の逆転も考えられ、引き続き調査を実施していく予定である。

P-4B-64

切迫早産に対するウリナスタチン膈坐剤の有用性について

さいたま赤十字病院 薬剤部¹⁾、日本薬科大学 臨床薬理学分野²⁾、さいたま赤十字病院 産婦人科³⁾

○佐竹 清¹⁾、中島 孝則²⁾、岩田 政則²⁾、宮本 純孝³⁾、中村 学³⁾、安藤 昭彦³⁾、藤掛 佳男¹⁾

【緒言】尿中から抽出されるウリナスタチン（urinary trypsin inhibitor; UTI）は、酵素阻害作用を持つことから急性膵炎などに臨床応用されている。産科領域では、UTI注射剤を主原料として院内製剤の膈坐剤を調製し、切迫早産の予防に適用している。これまでに我々は、UTI膈坐剤の物理薬理学的特性値からの最適処方報告とともに、赤十字病院へのアンケート調査による調製実績と使用実態について報告した。今回、UTI膈坐剤が使用された患者の子宮頸管粘液中顆粒球エラスターゼ（エラスターゼ）値を測定し、切迫早産予防の有用性について検討を行ったので報告する。

【方法】2014年2月から12月までに切迫早産の診断にて入院した患者を対象とした。入院時にエラスターゼ値を測定し、子宮頸管長との関係を調べた。また長期入院の患者において、複数回エラスターゼ値を測定し、子宮頸管長の推移と妊娠維持期間、分娩との相関性について調査を行い、UTI膈坐剤の有用性の評価を試みた。

【結果及び考察】切迫早産にて入院した患者20名のうち、入院時エラスターゼ値が基準値1.6 μg/ml以上の患者は13名（65%）であった。この時、入院時エラスターゼ値と入院時子宮頸管長との関係に負の相関が認められ、エラスターゼ値を低下させることが切迫早産の予防になることが示唆された。複数回にわたりエラスターゼ値の測定を実施した患者において、UTI膈坐剤の使用により値が低下し、その有用性を示唆する症例が認められたが、値が高くなる症例も確認された。今後はその要因を調べ、UTI膈坐剤の使用法を含め、更なる効果上昇に向けて研究を続けていきたい。

P-4B-61

サプリメント内服が横紋筋融解症を誘起したと疑われた一症例

名古屋第二赤十字病院 薬剤部

○安田 知弘、木全 司、今高 多佳子、青山 智彦

【緒言】近年、サプリメントの利用が拡大している。手軽に入手できる半面、それ自体による健康被害や医薬品との相互作用等が十分に広報されていないことが懸念される。今回、サプリメントが原因と考えられる横紋筋融解症を誘起した症例を経験したので報告する。

【症例】43歳男性。平成26年8月10日から全身倦怠感、乏尿を主訴に近医受診、精査加療目的にて当院紹介入院となった。入院時の血液検査所見は、血清クレアチニン値6.97mg/dL、クレアチンキナーゼ99437IU/L、血清ナトリウム値121mEq/Lであった。特記すべき既往歴および定期内服薬はなかったが、サプリメントとしてマルチビタミン&ミネラル及びセントジョーンズワート（以下SJW）を3年前から常用量を2日に1回内服していた。診断名は急性腎障害、横紋筋融解症、低Na血症であった。入院後サプリメントの中止、血液透析を施行し、併せて電解質補正を行った。入院後17日で血清クレアチニン値1.82mg/dL、クレアチンキナーゼ189IU/L、血清ナトリウム値143mEq/Lに改善し、退院となった。

【考察】SJWはセロトニン症候群を引き起こし、横紋筋融解症を発症することが注意喚起されている。またマルチビタミン&ミネラルはビタミンC及びD等の過剰摂取により腎障害を引き起こすことが報告されている。今回はSJWとマルチビタミン&ミネラル以外の内服薬がなく、基礎疾患もなかった。他に考えられる要因が乏しいことから、2種類のサプリメントそのものが横紋筋融解症を誘起したことが示唆された。

【結語】サプリメントと健康被害の因果関係の証明は、その品質や利用者の使用実態が把握しにくく、非常に難しい。しかし過剰摂取や相互作用により思わぬ健康被害が出現することもあるため、積極的な情報提供を今後もおこなっていく。

P-4B-63

ベグフィルグラスチムの有効性・安全性評価と適正使用に向けた取り組み

熊本赤十字病院 薬剤部

○坂田 美咲、浦田 由紀乃、平田 憲史郎、合澤 啓二、陣上 祥子

【目的】ベグフィルグラスチムはG-CSFの1つであるフィルグラスチムのPEG化により血中半減期を延長させることで、1サイクルに1回の投与で発熱性好中球減少症（FN）発症リスクを低減する効果を示す。しかし、本邦において本剤の有効性および安全性に関する情報は限られており、また、医療経済の観点から投与患者の選択や従来製剤との使い分けが重要な課題と考えられる。そこで今回、熊本赤十字病院（以下、当院）において本剤を使用した症例の有効性と安全性について検討し適正使用を試みた。

【方法】当院で本剤を使用した患者の診療録を後ろ視的に調査した。【結果】2015年5月までに解析が終了した症例は7例で、使用レジメンは、R-CHOP（3例）、Cabazitaxel（2例）、M-VAC（1例）、mLSG15（1例）であった。本剤を1次予防的に使用した症例は7例中3例であり、そのうちCabazitaxelを投与した2例においてFNを認めた。2次予防的に使用した症例は4例であり、そのうち3例は前クールでFNを認めたが、今回は認められなかった。残る1例は好中球減少をきたし治療延期となった。本剤使用後に認めた副作用は、腰痛（2例）、倦怠感、咳嗽、皮疹（各1例）であり、副作用による中止例は認めなかった。

【考察】今回の調査より、本剤の優れたFN予防効果と、高い忍容性を確認した。一方、本剤使用後に好中球の減少を認めた1例は、予防投与のタイミングが対象の中で最も遅かった（day5）。レジメンによる本剤の最適な投与タイミングについては一貫した報告がなく、最適な投与タイミングについて検討することにより有効性が高まる可能性も考えられた。今後はさらに症例数を増やし、本調査をもとに院内がん化学療法チームで使用基準を作成し、ベグフィルグラスチムの適正使用に取り組む予定である。

P-4B-65

当院におけるオペカートの運用について

徳島赤十字病院 薬剤部

○猪本 尚徳

当院では手術時に使用頻度の高い全身麻酔、局所麻酔を中心とした25種類の注射薬を1セットにしてトレーに収めており、循環器用トレー（CVトレー）2個、基本トレー11個を収納したカート（オペカート）として手術室に4台設置している。1トレーが患者一名毎の手術に用いられ、翌朝9時、使用済みのトレーを乗せたオペカートが2台薬剤部に運搬される。薬剤師は患者一名毎に使用された注射薬を記載した集計表を確認しながら使用された薬剤を補充し、各病棟別に使用された薬剤を集計する。以前は前日手術室で使用した注射薬を集計し、まとめて薬剤部に請求する形をとっていたが、新病院に移転した平成18年からは現在のようオペカートを運用することになった。このことにより手術前に注射薬をセットする手間が省略され、緊急時のオペに迅速に対応できるようになり、臨床現場（医師・看護師）の負担軽減につながった。上記作業過程については、問題点があればその都度改善を試み、より正確・迅速な業務を目指している。